

**僕はコンピュータの使い方もよく知らないし、携帯とかもよくわかんないし、車も運転できない。
でも、僕にとってアーティストでいることは、自分のすべてを捧げることなんだ**

ザ・ヴァインズが、クレイグ・ニコルズがついに掴んだ祝福のロックンロール！ バンドの蘇生と進化を同時にものにした快作『メロディア』到着　インタヴュー:粉川しの　通訳:網田有紀子　撮影:RIE TOMITA

THE VINES

フジ・ロック初日、レッド・マーキーを満員にしたザ・ヴァインズのパフォーマンスは驚くほどちゃんとしていた――いや、ちゃんとしているどころかひょっとしてコレは凄まじくよいのではないか!?ということにオーディエンスが気づくまで、殆ど時間は掛からなかったのではないだろうか。ヴァインズと言えば、前回の来日公演(2004年)でお客に悪態つきまくったあの問題児、クレイグ・ニコルズがいるバンドである。しかし今回のクレイグは、彼らを見守るファンはもちろんのこと、自分自身を傷つけることもなく、ステージ上でのびのびとぶっ壊れていた。ロックンロールの破壊と再生の物語を体現するように、幾度も歪に捻じ曲がりながらも最終的には美しい弧を描くメロディをその手中に収めていた。ヴァインズにとって2年ぶり4作目となるニュー・アルバム『メロディア』もまた、そんなクレイグの復活と再生を刻んだ傑作である。デビュー・アルバム『ハイリー・イヴォルヴド』同様にプロデューサー、ロブ・シュナフの地元ロサンゼルスでレコーディングした本作は、彼らにとって「二度目のデビュー」に近い作品と言えるかもしれない。「ロックンロールをやる才能しかない」男=クレイグ・ニコルズの極めて不器用な個性を責めるでも甘やかすでもなく、彼らはついに100%武器にすることができたのだと思う。

僕がいつもこうであってほしいと思ってる理想のバンドに、見た目にもサウンド的にも近づいてる気がする(クレイグ)

●まず、4年振りに日本に戻ってきてくれて、ありがとうございます!

クレイグ&ヘイミッシュ「サンキュー!」

●ニュー・アルバムが本当に素晴らしくて、ここまでヴァインズがヴァインズらしさを萎縮させることなく、のびのびと自由にやってくれたっていうのは、ファースト以来のことなんじゃないかと思うぐらいです。聴いているほうもオープンな気持ちになれる作品ですよね。

C(クレイグ)「ものすごく誇りに思ってるよ。僕がいつもこうであってほしいと思ってる理想のバンドに、見た目にもサウンド的にも近づいてる気がして、だから今はもうそれこそ有頂天って感じなんだ」

●本作は久しぶりにLAでロブ・シュナフとレコーディングしていて、バンドの原点に戻ったとも言えると思うんですが。

H(ヘイミッシュ)「ロブと一緒にやった2枚の結果に満足してたし、素晴らしい仕事をするプロデューサーだとわかってたからね。で、今回また頼むことにして、ロブが住んでるLAで作業することになったわけ。家族もLAにいるし、機材をオーストラリアまで運ぶのも面倒だからね。だからLAに行くかどうかは僕たち次第ってことになって、それで行くことになったんだ」

●今作の曲作りっていうのは、どのくらいから始めていたんですか?

C「2006年の終わりごろだね。で、去年の半ばごろにはほとんど書き終えてたって感じだったんじゃないかな」

H「『ヴィジョン・ヴァリィ』ツアーの合間に、リハーサルをやりながら新曲のほうにも取り組んでたんだ。これからまたライヴを始めてリハーサルをたくさんやるようになったら、また新しい曲に取り掛かることになるだろうね」

C「今すでに新しい曲が6曲くらいできてて、2~3週間のうちにデモを作るつもりなんだ。すごくエキサイトしてるよ。これまでで最高の出来に入ると思うし、実際このアルバムでもわかるように、僕たちどんどんよくなってきてると思うんだよね。だからこれから先は、もっとレコーディングやライヴをこなしていきたいと思ってるんだ」

●今回のアルバムを作るにあたって、どういうアルバムにしたいとか、曲作りにおいてどういった新しい試みをしてみたいとか、お互い話し合ったりした?

H「今回は内に自信がみなぎってたんだ。グレイトなアルバムが作れるって確信もあったしね。コンセプト・アルバムにしようとかいう話もなかったよ。まあ次のアルバムでひょっとしたら、ピンク・フロイドばりのコンセプト・アルバムを作るかもしれないけどね(笑)――全編で壮大な物語が綴られてる、みたいな」

C「ああ(笑)」

H「デヴィッド・ボウイみたいに宇宙空間からやってきた少年の話をしたりとか、アハハハ!」

●(笑)。この『メロディア』に収録されている楽曲にはふたつの大きな要素があるように思ったんです。ひとつは、ハイ・エナジーでハイ・ヴォルテージのロックンロール・ナンバーで、もうひとつが、サイケデリックでメロディアスな温かいチューンという。しかも、以前のヴァインズが奏でるサイケデリックって、もっと内側にこもった、ある意味自己完結しちゃってる精神世界のような、ちょっとした閉塞感もあったように思うんです。一方、今回のサイケはすごくアップリフティングで外に外に拡大していく感じがして、それがアルバム全体の風通しのよさにもつながってると思うんだけど。

C「うん、その通りだと思うよ。ふたつどころか、三つ目のパターンもあるんじゃないかな――ヘヴィでメロウな、60年代ポップっぽい曲がね。分けるとしたら、この三つがメインのスタイルになると思うよ」

H「うん、いい見方をしてるね。確かに今回は前ほど内省的じゃなくなって、外向きになってると思うし」

C「ああ、それもサウンドや音楽だけじゃなく、歌詞のほうも前より真っ直ぐでひたむきだし、サウンドにしても、奇妙なサウンドだらけというよりむしろ、ベーシックなギターやドラムで鳴らしてるサイケデリックなんだ。僕はこのアルバムを〝アート〟だと思ってるし、みんながこんなにも関心を持ってくれて、ほんと、すごく嬉しいんだよね。僕たちが大事に思ってるのは、作った当人だから当然なんだけど、ほかのみんなも大事に思ってくれてるっていうのが、すごく……。あと、かなりディープな曲も入ってるんだよ。もちろん単なるポップ・ソングも入ってるけど。何の意味もないけどサウンドはクール、みたいな」

●あなたたちって、今まで紆余曲折があったけど、でも実は1枚目の『ハイリー・イヴォルヴド』から、2年ごとにコンスタントにアルバムを出し続けてるんですよね。でも今作に関しては、その連続性の中にはちょっと置けない質の変化を私は感じていて。バンド内のメンタルな部分での変化があったのではないかな、と思ったんですが、

C「ああ、実際前作よりサウンド・プロダクションも高度になってるし、ヴォーカル・パフォーマンスもよくなってると思うし、うん、そのことをすごく誇りに思ってる」

H「君も気づいたと思うけど、バンドにとってどん底の状態からの変化があったのは確かだよ。〝暗黒期〟のバンドの状態がすごく反映されてたのが、前のアルバムの『ヴィジョン・ヴァリィ』だったと思うんだ――すごく怒りに満ちてて、ダークで、すごく孤独で、悲しげな部分を持ったアルバムだったからね。でも今回のアルバムはもっとポジティヴだし、さっき君が言ってたようにうんと外を向いてるアルバムだし、だから、そう、変化があったのは確かだよね。もっとポジティヴなバンドに変わったんだ」

C「うん、しかも2002年に初めてアルバムを出してから、2008年のまで間にCDを4枚作れたことにもすごく満足してるし、来年にはまたアルバムを出したいって、本気で思ってるんだ。あとはツアーやプロモーションの予定次第だよ。僕としては日本でライヴやって、オーストラリアに戻ってフェスに出た後スタジオに直行することになっても、まったく問題ないからね。そりゃ、曲作りの時間がもっと取れたら嬉しいけど、ある程度の妥協をしないと進むものも進まないから――それが音楽ビジネスってものらしいから(苦笑)。実際、どんどんそうなってきてるんだ」

H「どのバンドも毎年アルバムを出してた60年代だと、ワールド・ツアーなんてのもそんなに組めなかっただろうけど――ビートルズが覆すまでは、アルバムを出したら自分の母国をツアーして、またその繰り返し、っていう感じだったと思うんだ。だから、たとえばクリーデンス・クリアウォーター・リヴァイヴァルなんか、1年に2枚もアルバムを出したりしてたわけ。60年のバンドの多くがそうさ――ひたすら曲を作ってレコーディングして、国内をツアーしたらまた次のアルバム作りに入って……ってね。そういやAC/DCも、昔は毎年アルバムを出してたんだよな(笑)」

C「ビーチ・ボーイズなんか、2年でアルバム7枚出したことがあるって聞いたこともあるし――もちろん63~64年あたりの初期の話だけどね。すごい枚数だよ。でもダンディ・ウォーホルズのピートと、『60年代は毎年1枚』ってまさにその話をしてたとき、あいつ『でもどうせ半分は他人のカヴァーだろ』だって(笑)」

●(笑)。

H「ムフフフ(笑)。っていうか、当時はレコード契約で『毎年アルバム2枚出すこと』って決まってることも結構あったんだよな。クリーデンス・クリアウォーター・リヴァイヴァルの場合なんかはそうだったんだろうけど、1年に2枚出せなかったらそれが積み重なっていって、結局5年でアルバム10枚って契約になるっていう(苦笑)」

C「ミューズとかザ・ミュージックみたいなバンドのアルバムなら、3~4年待っても別に構わないと思うんだ。最高に素晴らしいバンドだからね。で、ほかのバンド、たとえばアークティック・モンキーズなんか、ファーストを出した次の年にはもうセカンドを出して、そのまた翌年には別のバンドでアルバムを出したりしてるよね(笑)。だからバンドによりけりだよ。自分たちに合ったやり方をしていけばいいんだ」

僕たちはいわゆる〝ミュージシャン〟じゃないし、僕なんか楽譜も読めないし、音楽の勉強もしたことないし、ギター自体にもほとんど興味がないんだ。僕が興味があるのは、ギターを使ってアレンジしたり、ハーモニーを作ったり、イメージ描写をすることのほうで、テクニック重視の知識なんて、退屈でしかないよ(クレイグ)

●ちなみに〝ヒーズ・ア・ロッカー〟がファースト・シングルなわけですけど、ここで歌われている〝彼〟はクレイグ自身だと思っていい?

C「イエス、僕だよ。っていうか、僕でもありほかの人でもあるんだ。誰のことでもあるんだよ。音楽が好きだったり音楽にすごい影響を受けてるキッズなら、誰でも当てはまるんだ。だから当然僕のことでもあるし、歌ってることもすごくよくわかるんだけど、ある意味では誰かを風刺っぽく描いてるというか、マンガのキャラクターみたいなところもあって、そういうのが全部ミックスされてるんだよ。全部僕自身でもあるし、ほかの人間や想像上のキャラクターでもある、と」

●この歌詞って、すごくストレートだけど、歌うのにすごく勇気のいる歌詞だと思うんですよ。

C「歌うのは大変だったんじゃないかって思うかもしれないけど――確かにパーソナルなことも歌ってるしね。でも僕の頭にあったのはいい曲ができたっていうことで、大事なのはそこだった。実際初めからそうで、僕はレコーディングそのものに集中してほかのことは全部二の次にしてきたんだ。僕はコンピュータの使い方もよく知らないし、携帯とかもよくわかんないし、車も運転できない。だって僕にとっては、アーティストでいることは、最高の結果を出すために自分のすべてを捧げることなんだ。そうやって僕たちもすごくいい作品を作ってきたと自負してるし、時には辛いこともあったけど、すべてを捧げるだけの価値はあったと思ってる。正しい決断だったと思ってるよ。基本的にはポップ・ソングなんだけど、僕たちはパンク・バンドなわけで、ステージに立つと必ず、向こう見ずな無鉄砲さっていうのも確実に表れてきて、それって無意識のものなんだけど、僕たちはいわゆる〝ミュージシャン〟じゃないし、僕なんか楽譜も読めないし、音楽の勉強もしたことないし、ギター自体にもほとんど興味がないんだ。僕が興味があるのは、ギターを使ってアレンジしたり、ハーモニーを作ったり、〝ヒーズ・ア・ロッカー〟とか〝トゥルー・アズ・ザ・ナイト〟みたいなイメージ描写とか、そういうことのほうで、実際どのトラックもみんなすごくアーティスティックだし、僕はギターの構造とか名前とかもよく知らないくらいで、そういう話は僕には退屈なんだ。テクニック重視の知識なんて、退屈でしかないよ」

H「もちろんプレイヤーとしてもバンドとしても上達してるし、それが僕たちを自由にしてくれてるのは確かだよ。おかげでよりクリエイティヴなことができるようになった、っていうか」

C「もっと自信もついたしね」

●今のヴァインズにとって、ロール・モデルとなるようなバンドって、いるのかな?

C「影響を受けたのは、デーモン・アルバーンとかキンクスのレイ・デイヴィスとかで、心から尊敬してるけど、でもバンドではそういう存在はいないっていうか……だって、いいバンドがいたとしても、それはあくまでもそのバンドであって僕たちじゃないからね。アーティストである限りは、自分だけにしか作れないものを作らなきゃだめだし、自分たちだけのヴィジョンがなきゃだめなんだ」

H「すごくいいバンドで僕たちも気に入ってて、たまに一緒につるんだりするやつらもいるけどね。たとえばキラーズなんかいい友達だし」

C「あいつらバンド結成したのが2002年だしね。確かにキラーズとは友達同士だしすごいバンドだと思うよ。そう、連中がシドニーでライヴ演ったときも、ステージで一緒にビートルズの曲を演ったんだ。あいつらアルバム2枚出しただけで、1万5千人の観客の前で演ったんだぜ。僕たちはシドニーで1万5千人も集められないもんな」

H「(苦笑)」

C「そんな感じであいつらはすごい人気なわけで、僕たちもそうなってみたいというか、もっとこう、ああいうふうにもっとプロフェッショナルで、インナーイヤー・モニターなんかも使

ってみたりっていうね。僕なんか耳が悪くなる一方だし、絶叫しながらステージの上を転げ回ったりしてるし、でもそれはそれですごくクールで楽しくて、別のものだってことで」

H「僕は個人的に、ミューズを尊敬してるんだ。ミュージシャンとして驚異的に素晴らしいし、曲も最高だし、ライヴもいつもエキサイティングだし、クールなバンドだよね」

C「僕はビートルズも尊敬してる」

H「当然だよ。でも言っとくけど、自分たちを今言ったようなバンドと比較しようなんて、思っちゃいないからね(苦笑)」

C「ああ、やっぱり曲を作ることとかって、あくまでも個人的な行為だし、自分たちがやってきたことに自信も持ってるしすごい誇りにも感じてるし、だから有名人の友達がいるってのはあくまでもオマケなんだよ」

昔の僕たちは自分たちがツアーする姿なんて、想像したこともなかったんだよ。素晴らしいアルバムを作っていくことしか計画してなかったからね。でも今は、新しい曲をステージで演れるのが嬉しくてしょうがないんだ(クレイグ)

●曲を書き、歌詞を書き、それを人に聴かせるということ……そのことが持つ意味って、ファーストの頃と今とでは、あなたの中でその自意識は変わってきていますか？

C「僕自身は昔と何も変わってないよ。僕やバンドのことをまだ誰も聞いたこともなかった頃から、何も変わってないんだ。今も同じさ……セレブたちと知り合えるようになったのはクールだけど(笑)、変わったのはそれくらいだよ」

●(笑)。このアルバムには美しい曲がたくさん入ってますが、その中でも私が一番好きなのが〝トゥルー・アズ・ザ・ナイト〟なんです。

C「僕もだよ」

●ほんとに？　すごくトラヴェリングなサイケデリックな曲で──この曲が生まれた経緯について教えてもらえますか？

C「あの曲は、しばらく前からメロディだけ出来てて、歌詞のほうがずっとついてなかったんだ。でもまあまあの出来だとは思ってたけど、そこまで素晴らしいとは思ってなかったよね。それが最近またあの曲のことを思い出すようになって、よく弾くようになってたんだ。で、弾きたいと思うってことはいい曲に違いないと思って、歌詞をつけてみたんだよ。それが曲の前半部分で、その時点ではそれで完成だと思ってたんだ。で、実はほかにもうひとつ別の曲があって、ほかのメンバーにも言ったんだけど、最初の曲にすごく似ててリズムも同じだったんだよね。それでふたつをくっつけてみたんだけど、これまでで最高のレコーディングができたと思ってるんだ。音楽的な部分も何もかもね」

H「ストリングスもいい味出してるよな。スタジオに弦楽四重奏団を呼んだんだ」

C「最初スタジオでシンセサイザーでデモを作って、その後、本物のストリングスを入れてもらったんだ。本当に、ディープで美しい曲に仕上がったよ──自分でそんなこと言うなんて傲慢かもしれないけど、でも君が言ってくれたように、僕も同じ気持ちで、僕にとってもあの曲は一番のお気に入りだし、今世間に出回ってる最高の音楽と同レベルに達してると思う。あのトラックは特にそうだよ」

●アルバムを『メロディア』というタイトルにしたのは、どういう思いからだったんですか？

C「最近はアルバム・タイトルが短いほうが受けるって思ったんだよね。耳触りもいいし、意味合いもクールな感じがするし……そういったことを全部考え合わせて決めたタイトルなんだ。僕の設定では、メロディア＝目に見えない世界、ってことになってて、曲に出てくるキャラクターはみんなその世界に住んでるんだ」

●6年前に話を訊いたとき、クレイグが「未来が怖いんだ」って話をしてたのが、すごく印象に残ってるんです。そのときなぜあなたがそんなふうに言ったのか、私にもよくわからなかったんだけど、今のあなたは、自分の未来が怖いですか？

C「そうだな、僕の未来はまぶしすぎて、サングラスが必要って感じかな(と言ってサングラスをかける)」

●(笑)。

H「6年前ってことは2002年の話？」

●ええ。

H「2003年とか2004年には、確かに未来は怖いものだったたね(笑)」

C「うん。自分たちがツアーする姿なんて想像したこともなかったからだよ。この僕が旅して回るようになるなんて、思ってもいなかったんだ。子どものころも、周りの大人がお金を貯めて休暇に旅行に出かけるのが不思議でしょうがなかったしね。実際、そういうことに憧れたことがなかったんだよ。それが、『メロウ・ゴールド』を手がけたことのあるプロデューサーが僕たちの曲を気に入って一緒に仕事したいって言ってきてくれて、すごく嬉しかったからLAまでレコーディングに行ったんだけど、そのときツアーの話やなんかも彼から聞かされたんだよね。で、実際演ってみたらとにかく音がデカくて騒々しくて、僕たちもすごい注目を浴びるようになって……もちろん後悔はしてないけど、もともとの計画にはまったく入ってなかったんだ。素晴らしいアルバムを作っていくことしか計画してなかったからね。自分たちはライヴ・バンドだという認識は、まったくなかったわけ。でも今はもっとリハーサルもやってるし、抵抗もなくなったし、この夏のフェスティヴァルもすごく楽しみにしてる。新作を聴いてくれた人たちからの反応もいいし、新しい曲をステージで演れるのが嬉しくてしょうがないんだ」

●明日のフジではニュー・アルバムの曲がたくさん聴けると思っていていいですか？

C「うん、もちろん。明日のステージを観てもらえば、今日の僕の話とか言動のすべてに、納得がいってもらえるんじゃないかな。ここに来たのはアルバムの話をするためでもあるんだけど、でも僕はお喋りより演奏するほうがずっと得意だしね。だから僕はギターを弾くようになったんだと思うし。僕だって喋ることはできるけど、普段の会話より曲の中の僕のほうが、ずっと頭もいいんだ」

●『メロディア』ってヘッドフォンで聴くより、ライヴで聴きたくなるアルバムなんですよね。

H「うん、実際ライヴはどんどんよくなってきてるよ。リハーサルも頑張ってるし、ライアンとブラッドがいるおかげでステージできれいにハモれるようにもなったし、今の僕たちは小奇麗で洗練されたユニットなのさ(笑)」

C「そう、僕もワクワクしっぱなしだし、みんなにもすごく楽しんでもらえてると思う。みんながハマってくれるのはすごく嬉しいことだし、明日も必ず最高のショウをやってみせるよ」

H「まだまだ荒削りなところもあるけどね」

C「ああ(笑)。僕たちは、超洗練されたバンドっていうのにはなれないってことに気づいたんだ。プロ意識は増したけど、たまに行き当たりばったりなことをやったりするっていう。でもそこがライヴの面白さでもあるしね。途中でメロディを変えてみたり、ギターを放り投げたり」

●(笑)。

C「そのほうが楽しいよ(笑)」



しのたんの五代目ですが何か？

今年も夏が終わりました。

この10年というもの、私にとって「夏」とは極めて狭く垂直に限定された季節であって、つまりそれは夏フェスと自分の関わり合いの中だけで感じられる暑さだったり、汗だったり、疲労だったり、感動だったりします。フジ・ロックが始まった12年前にロッキング・オンに入社し、9年前にサマーソニックとロック・イン・ジャパン・フェスが始まって以来、私の夏は常にフェスを中心に回ってきました。自分がそれ以前に一体全体どんな夏をすごしていたのか、今となっては殆ど思い出せません。あ、でも大学時代の夏休みはずっとイギリスにいて、毎年レディングやVフェスに通っていたので行動原理は大して変化していないと言えるかもしれません。

もちろんかつてのそんなフェス・オーディエンス時代と今では状況が全く異なり、最大の変化は夏フェスにオーディエンスとして参加するだけではなく、BUZZの編集者としてフェスを記録し、アウトプットする作業がメインになっていることです。加えてRIJFのスタッフとしてバックヤードを走り回り、ロック・フェスの成り立ちを裏側から知る機会も増えてきました。夏フェスの表と裏、そして記録。この3本を大きな柱としてフェスの総体を捉えていく日々が、私の夏です。フェスが始まる前から、そしてフェスが終わった後もフェスに「捕まっている」気持ちが抜けきれないのは、それゆえかもしれません。

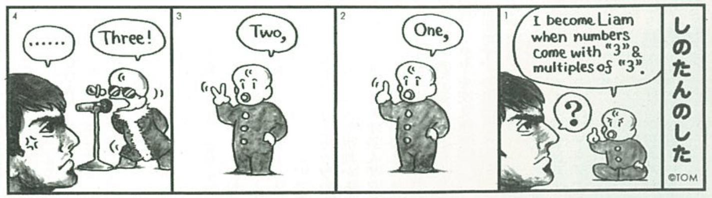
ちなみに今年の夏はサマソニ直前に林が倒れて一時戦線離脱、サマソニ直後に内田が倒れて入院と非常事態頻発のRO編集部でした。フェス・シーズンの修羅場は毎年恒例ですが、こんなにリアルに修羅場った年は久々じゃないだろうか。私の高血圧はフジの2日目がピークで、この日の記憶は途中で完璧ブラックアウトしています。どうやってホテルに戻ったのかも未だ謎。

それでもなんとか無事にBUZZ、そしてROをこうしてお届けすることができました。ご覧の通り、今月のROは新作迎撃モードで完全に前を向いています。オアシスです。スリップノットです。ヴァーヴは初来日の話より新作の話がメインです。ツェッペリンのSHM‐CD化&BOXセットはとんでもないです。8月下旬にはメタリカの威風堂々の新作が到着し、ブロック・パーティーの新作もいきなりDLできました。そう、すでに気分は秋です。だから今月号にはフェスの残滓は殆ど感じられないのではないでしょうか。2008年の夏とフェスは全てBUZZに閉じ込めてあります。ぜひそちらもチェックしてみてください。

先に書いたように、BUZZは2008年のフェスを総体として記録した一冊です。しかしそれは予め総体の記録として存在するのではなく、個々人の記憶のコラージュによって成り立っています。そういった意味で、私個人にとって今年最も深く胸の奥に刻まれた記憶はフジのマイ・ブラッディ・ヴァレンタイン、そしてサマソニのザ・ヴァーヴのステージです。マイブラは17年ぶりの再来日、ヴァーヴは解散から11年ぶりの初来日。彼らは共に自分の手から「奪われた」という被害妄想を持つバンドでした。長年の沈黙を、長年の理不尽な不在を埋めてくれと切に願ったバンドでした。結果、マイブラは時を止めていました。ザ・ヴァーヴは時から自由でした。彼らは、奪われたのではなかったのだと。〝アイ・オンリー・セッド〟が、〝ディス・イズ・ミュージック〟が響いた瞬間、謎は解け、私は勝手に和解を手にしたのです。

こうして今年も、短くも濃い夏が過ぎていきました。夏フェスは来年も、そしてその次の年も巡ってくるはずです。その連続性の中で、永遠のような一瞬を一体いくつ見出すことができるのか。私は来年も、それが楽しみでなりません。

粉川しの



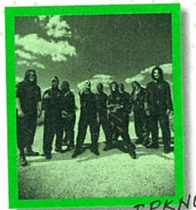
次号、ロッキング・オン11月号は10月1日発売です!!

現場始末記 取材ノートから


pic by MITCH IKEDA
OASIS

8月12日、ロンドンにて／オアシス

取材前日の夜、今回のケアの為にわざわざ日本から渡英していたソニーのM氏から電話が。「実は連日の取材攻めに嫌気がさしたのか、ノエルが先週から海外プレスの取材を全部ドタキャンして休暇に入ってしまいまして……明日の取材ではノエルが休暇をとっていることは絶対リアムに言わないでほしいのです」。確かにこれを知ったら真面目に取材をこなしているリアムは激怒するだろう。くわばらくわばら……と呪文を唱えながら眠りについた筆者。翌日、何も知らないリアムはいつものように時間きっかりに、上機嫌で登場。取材中もフレンドリー・モードで大助かりだったのだが、こんな重大事を相手に隠しているというこちらの罪悪感からか、ノエルの話題が出る度にビクッと動揺し、心臓が止まりそうに。1時間で5kgは痩せた。この翌週行われた4人揃っての写真撮影(勿論リアムも来ます)と、ノエル取材の現場のムードは、次号で詳しく。（児島由紀子）


SLIPKNOT

7月31日、ヴァージニア州にて／スリップノット

NYから2時間。空港からマネージャーに電話すると、「そうだっけ」と言われトホホ。しかし、「今日の飛行機で戻りますのでなんとか5時間以内には」と言うと、5分後に電話がかかってきて、「今すぐできる！」とのこと(笑)。急に言われたはずなのに嫌な顔せずさっそうと登場したコリィ。元々かっこよかったけど2倍増し。イーサン・ホークを若くして引き締めた感じで、憑き物でも落ちたように清々しく、流行のパナマ帽まで被って。TシャツにはNERDと書かれていたけど、それがまた素敵！あまり顔をジッと見すぎないよう、遠くの壁を見ながらしゃべってしまった(あり得ない！)。「アイオワ」を思わず「オハイオ」と言ってしまったのだが、それは舞い上がっていたからじゃないはず(汗)。「君だけじゃないから気にしないでいいよ」と優しい。しかし、写真を撮らなくて大後悔。花の命は短くて、次に会った時もかっこいいとは限らないから。（中村明美）


pic by RIE TOMITA
THE VINES

7月24日、東京にて／ザ・ヴァインズ

4年ぶりの来日が実現、取材当日までどうなるかわからないと言われてどきどきしていたら、クレイグは取材前の写真撮影のときから笑顔&超ハイテンションで、まさに「He's a rocker」を地で行くいろんなポーズを自らとってくれたり、ここで疲れちゃったらどうしようと心配になるくらいのサービス精神旺盛モードだった。でも取材が始まってからも変わらず笑顔でよく話してくれて、新作を作り上げた達成感と自信が感じられたし、ヘイミッシュとの笑いの絶えない楽しいやりとりからも、現在バンドがとてもいい状態にあるのが伝わってきた。そして、自分の未来が怖いどころか「まぶしすぎる」と言って実際にサングラスをかけてみせる姿は微笑ましくて、見ているこちらもまぶしくなるくらい輝いていた。それを見てほっとしたのと同時に、これからもずっと、世界がこの繊細な心にやさしくありますようにと願わずにはいられなかった。（網田有紀子）


pic by HIROHISA NAKANO
CAJUN DANCE PARTY

8月12日、東京にて／ケイジャン・ダンス・パーティ

いやぁ〜、若い。写真を見る限りA(アークティック)・モンキーズが登場した時みたいな「げっ、ガキじゃん！」な驚きは薄かったのだが、実物が放つ強烈なティーン臭ったら無い。特にダニー。若い、というかこの人の天真爛漫は最早「妖精」の部類。ケイジャンのソングライティングの構造を澱み無く説明しているロビーの横で、回転椅子をクルクルさせながらあちこち移動して遊んでいたり、かと思えばくるりと我々に背を向けて何も無い壁をボーっと眺めてみたり、手元のお菓子を派手にばら撒き、「さぁさぁオレのいたずらを見てくれたかい？」と言わんばかりに人の顔をにゅーっと覗きこんできたりと、フリーダムにもほどがある立ち振る舞いのオンパレードなのだ。一方のロビーはダニーの奇行の数々にも全く動じず、話してる最中に理不尽にブン殴られようが何されようが仏の表情でダニーの才能を賛美する、出来すぎた「妖精」の理解者であった。ナイス・タッグ。（粉川しの）

LETTERS

気付けば9月。夏は終わっても、来日もたくさんあるし、夏以上にロック漬けになりそうな予感。

さて、見た目も夏らしいカート・コバーン表紙の先月号は「90年代」特集。リアルタイマーばっかりの編集部、作っていてもそれぞれに思いのたけを注ぎ込んで、異様に筆圧の高い特集になったように思います。それは読者のみなさんにとっても同じだったようで、他人とは思えないような感想をたくさんいただきました。

「僕がロッキング・オンを購読し始めたのが、まさに90年1月号からで、それまではストーンズやピストルズ、スミスといったレジェンドしか知らなかった僕にとって、ライドやラッシュ、マイブラ、ニルヴァーナ、ホールと次から次へと出てくる、リアルタイムで鳴る新しいロックに衝撃を受け、聴きまくったことを思い出します。あれ以来18年間、ロッキング・オンは欠かさず購読していますが、気がつけば『未だに現役でロックを日常的に聴いてる最年長の世代』になってしまっていたんですねえ」茨城県・岡野一也(36歳)

「表紙としばらく見つめあいました(笑)。うまく言えませんが、こんなに今回の特集に合う『The 90年代』な写真はないってぐらいインパクトがありました！ 今月号の特集はテキストもそうですが、レイジ時代のザックなど『時代の瞬間を撮った』写真が興味深く、いちいちじーっと見てしまいました。また新しく興味を持ったバンドもいて、今からさかのぼって聴いていきたいと思います♪」

青森県・樋口慎(26歳)

「90年代特集とてもよかったです。私はぎりぎり90年代に洋楽リスナー・デビューしました。高校で隣のコからスーパーグラスやプロディジーを教わったっけ……。90年代は私にとってはホームです。田舎というか落ちつく場所というか。感傷的な部分も多少はありますが、原点でもある。そこに一度戻るとまた違うエネルギーが発せられているのを感じます」

茨城県・田沢真梨子(26歳)

こんな世代からも90年代にシンパシーの声が届いています。

「意識してないのにもっているCDが90年代(洋・邦ともに)にかたよってしまう私にとって、今回の特集はとても楽しめました」

北海道・山口華子(15歳)

そんな山口さんのお父さんは「スリップノットの写真を見て本気で怖がって」いたそうだが、怖がっている場合じゃありませんお父さん。血湧き肉躍る報せなのです。90年代熱に拍車をかける新作リリース、続々。

「まさに根耳に水、ザックの新作！ パートナーはなんとセオドアかい!! レイジ再結成に手放しで喜べない自分にとって、これは最高で最大のニュースです。レイジで新譜を制作しないなら、新たなバンド、あるいはプロジェクトで新作を出す、これがザックのあるべき姿でしょう。ワン・デイ・アズ・ア・ライオンに超期待!!」

神奈川県・金子たけし(37歳)

「ザ・ヴァーヴの新作がやっとリリース！ 待ってました(×100)。レヴューを見ると初期に近いということで、かなり嬉しいです。自分にとってヴァーヴは『アーバン・ヒムス』ではなく、初期のシングル3枚と『ア・ストーム・イン・ヘヴン』なのです！ 『アーバン・ヒムス』はリチャードの音であって、決してヴァーヴの音ではないですから。本当のヴァーヴが帰ってきたという意味で、今回の新作はすごく楽しみ！」

栃木県・近藤真弥(20歳)

「GOD IS BACK!!! ついにきましたね、オアシス新作！ ユーチューブで20秒程公開されている新曲を聴きましたが、血が沸き立ちました！ これぞロックンロール!! たった20秒でこんなにも人を熱くすることができるなんて、やっぱオアシスは別格です。10月が本当に待ち遠しい！ それまでは20秒を永遠にリピートし続けます」

東京都・森山麻紀(25歳)

「オアシス新作リリースということで、今からとても楽しみにしています。私は『ディフィニトリー・メイビー』や『モーニング・グローリー』のころのオアシスの姿は見ていません。でも『ドント・ビリーヴ・ザ・トゥルース』からの新たなオアシスの伝説をリアルタイムで見られることに大きな喜びを感じています。私の倍以上年上ですが、リアムとノエル、オアシスは私のヒーローです！」

東京都・佐藤茜(15歳)

髪を切り、スリムになったリアム・ギャラガーのインタヴューは巻頭で！

さて、今月のお題は「2008年夏、ロックな思い出」。当然のように怒濤のような夏フェス・メモリーズが押し寄せてきた。まずはフジの思い出。

「今年で4年連続参加となったFRF！ 正直特別な期待もなく、『夏だし、苗場？』みたいな軽いノリで参加したのがよかったようで、終わってみれば自分史上最高に楽しいFRFでした！ FRFで初めて知って、楽しいカッコいい!!っていうアーティストもいて、とっても満足でした(特別な予習しなくても楽しめちゃうもんですね)。3日目には激しい雷雨もありましたが、『これもフジだよね～』と全身ズブぬれになりながら笑えたのもFRFならではで、こういう大らかな状態って必要だなって思いました!!」

東京都・河野恵(34歳)

「私の大好きなヴァインズがフジで復活する！ということで初のフジへ行ってきました！ 正直、キャンセルしないかな?という不安がギリギリまであったのですが、フジ前日、RO69のブログに『絶好調』とのクレイグが写っており、安心と興奮の嵐でした。当日はすんばらしいパフォーマンスで絶好調どころではなかったです!!」

埼玉県・山崎由布子(18歳)

続いてサマーソニックの思い出。

「コールドプレイの圧倒的なパフォーマンス、美メロ名曲の連発とサイドステージでの演奏、客席内でも演奏、SMAPのカヴァー"世界に一つだけの花"。感動の嵐でした!! サマーソニックの新たな伝説になった」

奈良県・中島正人(41歳)

いきなりクリスが「セカイニ～♪」って歌い出したときには、腰抜かしそうになったけれどもね。

「ついに、ザ・ヴァーヴのライヴを目撃しました。本当に素晴らしかったです。"ドラッグス・ドント・ワーク"では間違えて2回やったり、ハプニングもありましたが、終盤の"ビター・スウィート・シンフォニー"、やっぱり最高でした。最後の"ラヴ・イズ・ノイズ"もよかったので新譜、かなり楽しみです」

埼玉県・渡辺一樹(24歳)



香川県／山上因彦

今年の夏フェスについては、すでに発売になっておりますロッキング・オン増刊「BUZZ」をどうぞお手にとってご覧ください！ 写真もテキストも、ぎっしりびっしり「夏」が詰まっております。とはいえ、フェスばっかりが夏ではないのであって、むしろこっちのほうにある意味でロックを感じてしまう淡く切ない「夏の記憶」もある。

「毎月楽しく拝読させていただいています。今年の夏のロックな思い出といえば、至近の場所に雷が2回落ちました。死ぬかと思う体験でした。これからもお身体大切に、ガンバってください」

神奈川県・神保正行(29歳)

ご無事で何より……。

「私の勤める会社は、お盆休みも正月休みもありません。この10年、金曜が休みになったことなど一度もないのに、どうしてもマーズ・ヴォルタのライヴに行きたくて、チケットを入手。ライヴが始まる瞬間まで"延期になって"と祈りましたが思い届かず、手元にはただの紙切れと化したチケットが1枚。悲しすぎる。すごく観たい、チケットもある、なのに行けない……人生、うまくいかなすぎる。いまだショックから立ち直れずにいます」

茨城県・森ゆかり(31歳)

「この夏は海・プールに行く予定で、筋トレを半年前からやっていました。もう今ではTシャツ姿でも『筋肉ついてるなー』とか言われます。特に腹筋が、鉄板のようにガチガチです。その腹筋のおかげで『おなか最近出たよね?・』と言われるようになったほどです。さて、今年の夏は1回しか水着を着る機会がないようです」

愛知県・可児哲也(19歳)

で、結局海とかプールには行ったのか。ハガキからだけでは分からなかったので続報を待ちたいと思う。

「先月、好きだった子にアタックしてフラれた。本当に好きだったのに。なんてことだ」神奈川県・北原海(24歳)

「まだありません。これから作ります」

東京都・竹前正昭(30歳)

竹前さん、思い出はできたでしょうか？ それぞれの夏は終わり、季節は移り変わっていく。次号、ロッキング・オン11月号は10月1日発売です!!



大阪府／樽木厚

ロッキング・オン・レヴュー、投稿原稿募集のお知らせ

■内容に制限はありません。〈投稿係〉まで郵送、あるいは、弊社ウェブサイト(http://www.rock-net.jp)の弊誌ページからご応募ください。

■ワープロ、手書き(縦書き400字詰め原稿用紙を使用)どちらでも可。文字数／枚数制限はありませんが、3000～4000字が目安です。

■書き出しの5行にタイトル、住所、氏名、年齢、電話番号を必ず書いてください。なお、住所掲載希望者は「掲載可」と明記して下さい。

■採用された方には掲載誌と原稿料(400字あたり¥4000、発売当月払い)が送られます。また、原稿の返却は致しません。ご了承ください。

■原稿の採用はスタッフの推薦により、編集長が決定します。

PRESENTS

今月のプレゼント

綴じ込みハガキのプレゼント欄にご希望のプレゼント名・品番(Tシャツの場合はサイズ、男女、色の希望も忘れず)をご記入の上、編集部宛てにお送りください。締め切りは9月16日(火)必着です。LETTERS欄に掲載された方にはプレゼントを優先的に進呈(ご希望に添えない場合もあります)。ご意見ご感想、どんなことでも構いません。お待ちしております!!

1



サマソニのヘッドライナー完遂!
コールドプレイのTシャツ(エンジ,M)を1名様に
(EMIより)

2



フジ・ロックでの素晴らしいライヴも記憶に鮮やかな
ザ・ミュージックのステッカーを30名様に
(ユニバーサルより)

3



祝・来日! 祝・新作! 見事前線復帰を果たした
ザ・ヴァインズのサイン入りポラロイドを1名様に
(ROより)

4



初期作品のリイシュー記念、新作も待たれる
U2 の缶バッジ・セットを20名様に
(ユニバーサルより)

5



『レッド・アルバム』を引っさげての来日も近づく
ウィーザーのTシャツ(赤、M or L)を各1名様に
(ユニバーサルより)

6



ニュー・アルバム『将軍～SHOGUN』を心して待て!
トリヴィアムのサイン入りポラロイドを1名様に
(ROより)

7



フジで来日、豪雨の中のステージで気を吐いた**ベン・フォールズ**のサイン入りポラロイドを1名様に (ROより)

8



エディ・ヴェダーがサウンドトラックを担当したことでも話題の映画『イントゥ・ザ・ワイルド』の特別鑑賞券(新宿、テアトルタイムズスクエアのみ有効)をペアで10組20名様に(メゾンより)

9



RO「ラディカリズム」Tシャツ(白or黒／SorMorL)を10名様。裏地にプリントされてます (ROより)

10



音楽ギフト券(3000円分)を計20名様に
(ROより)



The Hawk Is Howling/Mogwai

ザ・ホーク・イズ・ハウリング/モグワイ

WOS040CDJX (WALL OF SOUND/PIAS/ホステス) CD+DVD ¥2,980 9/17

1.アイム・ジム・モリソン、アイム・デッド
2.バットキャット
3.ダンフェ・アンド・ザ・ブレイン
4.ローカル・オーソリティ
5.ザ・サン・スメルズ・トゥー・ラウド
6.キングス・メドウ
7.アイ・ラヴ・ユー、アイム・ゴーイング・トゥ・ブロウ・アップ・ユア・スクール
8.スコットランズ・シェイム
9.サンキュー・スペース・エキスパート
10.ザ・プレサピス
11.ドラキュラス・ファミリー（ボーナス・トラック）
12.ストゥーピッド・プリック・ゲッツ・チェイスド・バイ・ザ・ポリス・アンド・ルーズ・ヒズ・スタッフ・ガールフレンド（ボーナス・トラック）
13.デヴィル・ライズ（ボーナス・トラック）

■ロックの新本格へ

ライヴのエネルギーをいかに再現するか。それは彼らがスタジオ録音に臨む上で、程度の差こそあれ常に付きまとい続けた問題だったに違いない。モグワイの真髄は、その録音可能域の限界に迫るノイズと音圧にある。前作『ミスター・ビースト』はまさにその認識から生まれた作品だった。あるいは3rdの音響的なアプローチや4thのソングオリエンテッドな洗練も、だからこそ活路を見出されたオルタナティヴな転回といえる。インストゥルメンタル・ロックの極限値を刻んだ初期の2作をへて――つまり00年代以降、彼らが奮闘してきた音楽的漸進は、ここに起点があると見て間違いない。

しかし、本作が望む光景は、そうした文脈とは異なるスペクタクルを描く。これまでの様々なトライアルや困難さが、各論的なパラダイムを超えて結実を見る音楽的な高みは、それこそ大文字のロックと呼ぶのがふさわしい。前作で再覚醒したハードコアな獣性がうねるM②⑦。音像の細かなひだにまで静謐な詩情とメランコリーが刻み込まれたM⑥⑧。そしてM⑤の勇壮に流れるサウンドスケープに触れ、いつの間にこんなにも安らぎと深い情感に満ちた喚心を奏でるバンドになったのかと、胸を打たれる。ここで彼らが見せる境地は、例えばベックが『モダン・ギルト』で、あるいはレディオヘッドが『イン・レインボウズ』で見せたひとつの達観にも近い。創作のサイクルが一回りし、大きな円環が閉じられたような充実と成熟を感じる。

結成13年。異物の役回りは終わり、『王道』に手を掛けたことを宣言する6作目。ここから新たなミッド・ヒストリーが始まる。

天井潤之介



セイント・ディンフナ
/ギャング・ギャング・ダンス
PCD-22316 (P-VINE) ¥2,310 9/5

■人狼になろう

ニュー・フェイズへ鮮やかに脱皮したTVOTR(ティーヴィー・オン・ザ・レディオ)の新作に号泣したその涙が乾く暇もなく、脳髄に鳥肌が立つ音楽がブルックリンからもう1枚登場する。本作が4thになる4人組GGGD(ギャング・ギャング・ダンス)は、インプロ・ジャムやコラージュを中心にサンプラー、エフェクターで音やジャンルの垣根を溶かしていくフリー・スピリットなユニット。AC(アニマル・コレクティヴ)からポップ/フォークの感性を減らし、エレクトロ・ミュージックの分量を増したとでも言おうか。パーカッシヴなサウンドをして「トライバル・ミュージック」とも称される彼らだが(ボアダムスによるドラム楽団BOADRUMS88で先日ブルックリン版を担当)、ここではアブストラクトな音のレイヤーで酔わせるだけではなくメロディックなアプローチやクラブ風トラックも展開。前作(こちらも素晴らしいです)を上回るアクセスしやすい内容になっている。それでも音のジャングルの中を動物がうごめくようなスリルとダイナミズムは健在で、都市化する世界に響く野蛮な叫びを聴いていたら背中に毛が生えてきた。わお。9月の来日でぜひ彼らのダイナミックなヴァイブに感性と腰を揺さぶられていただきたい。**坂本麻里子**



ビューティフル・ハミング
/スモール・マーシーズ
BVCP-21624 (BMG) ¥2,548 9/24

■ブリスベンが生む清らかな歌

オーストラリア出身の4人組、スモール・マーシーズのデビュー・アルバム。「クラシック・ロック・バンド」との事だが、ロック色が強いナンバーは筆者が思い描くツェッペリンやストーンズといったクラシック・ロックではなく、80年代のボン・ジョヴィに代表されるサウンドといった感じで、スタジアムで大合唱するのに似合いそうなポップ・ロックのナンバーが多い。もちろん、もう少し彼らの個性を出した遊び心あるサウンドでも良かったかなとも思うのだが、それでもセンチメンタルなピアノ・バラードからエアロスミスばりの壮大なロック・バラードまで、多種多様なドラマティックな曲が詰まっているのはおいしい。そしてそこにまたしっくりくるのが、ヴォーカル・スティーヴの歌声！ 彼のさらさらとした高めの声は通りがよく、同郷のサヴェージ・ガーデンのダレンにも通じるものがある。アンセミックなメロディが際立たせるヴォーカルは、聴く者を勇気付けてくれるような高揚感が漂っている。さまざまな珠玉のポップ/ロックバンドを生み出してきた音楽都市ブリスベン。また一つ、新しいバンドを生み出してくれたようだ。**上田南**



レイズ・ユア・ハンズ　ザ・グレイテスト・ヒッツ
/エクスプレス2
KCCD-343 (KSR) 2CD+DVD ¥2,415 9/24

■UKハウス歴戦の勇者の記録

この人達がいなかったらUKハウスシーンは今と違った形になっていたかもしれない。92年にジュニア・ボーイズ・オウンからデビュー7インチをリリースしたXプレス2。いわばケミカルの兄貴分でもある彼らが、初のベスト盤をリリースする。

デビュー曲〝Muzik Xpress〟の時点で、ギターのカッティングなどロックの要素を大胆に取り入れ、それまでのシカゴ・ハウスの流れとは違う新たなテイストのトラックを作り上げていた彼ら。デヴィッド・バーンをフィーチャーした〝レイジー〟も、06年のセカンド『メイクシフト・フィールグッド』でのザ・ミュージックのロブを迎えた〝キル・ワンハンドレッド〟も、数々のアンセムはすべからく「歌」としての輝きを持つものだった。15年のキャリアを持ちながらフル・アルバムは2枚と寡作な彼ら。この段階でベストってどうなのよ?とは思いつつ、やっぱりこうして並べてみると一つ一つのトラックが強力。アフリカ・バンバータをフィーチャーした新曲〝ファイア〟もえらく攻撃的でテンションが上がる。CD2収録のスウィッチによる〝ギヴ・イット〟リミックスも必聴。**柴那典**



Melodia/The Vines

メロディア/ザ・ヴァインズ

BVCP-24141 (BMG) ¥2,300 9/24

1.ゲット・アウト
2.メインジャー
3.A.S.III
4.ヒーズ・ア・ロッカー
5.オレンジ・アンバー
6.ジャモラ
7.トゥルー・アズ・ザ・ナイト
8.ブレインデッド
9.カーラ・ジェイン
10.メリーゴーラウンド
11.ヘイ
12.ア・ガール・アイ・ニュー
13.スクリーム
14.シー・イズ・ゴーン

■自覚を伴った天才の凄み

前作『ヴィジョン・ヴァリィ』は、イギリスでこそ高く評価されたが、かつて『ローリング・ストーン』の表紙を飾ったのも忘れちゃったの!?というくらい、アメリカではシビアな評価を下された。悪い言い方をするならば「金太郎飴」なヴァインズの音楽性を、「進化してない」と評するのは簡単なわけで、大御所のクラシック・ロック以外はエクレクティックでエッジィなものしか評価しないという昨今のアメリカの状況を考えれば、当然だったのかもしれない。

しかしこの最新作で、再びヴァインズは正しく評価されるような気がする。聴いて一発でヴァインズと分かるその音楽性は、大きく変わってはいない。が、ここまで楽曲が真っ直ぐ突き刺さってくるのは、初めてと言っていいと思うのだ。「歌が閉じてしまわず広がっていく感じ」が、とにかく素晴らしい。かつて「ニルヴァーナ・ミーツ・ビートルズ」と言われたヴァインズ。何とも安直だなと当時は思ったものだが、退廃とエヴァーグリーンなメロディ、サイケデリアがカオス状態のまま混在した初期の音楽を考えると、それはある点において的を射ていたのかもしれない。このアルバムで、ビートルズ的なメロディ展開を見せるスロウな楽曲は珠玉といっていいほど研ぎ澄まされたものになっている。グランジ的なアプローチは、「刹那」という言葉を焼き付けたようにひりひりしている。立ち昇るような、美しさとはかなさ。クレイグがかつての自分に言い放つような〝ヒーズ・ア・ロッカー〟、目覚めたロックンロールは、こんなにも強い。**羽鳥麻美**

■才能は裏切らない

曲がいい。まるで起爆剤のような閃きが詰め込まれている。このアルバムの魅力は、それに尽きると思う。全14曲、そのほとんどが2分そこらのナンバー。感電するようなギターリフをぶっ放して、そのまま疾走するグランジ・ナンバー。もしくは、アコースティック・ギターを爪弾いて歌う気怠いバラード。どちらも、ほとんどAメロとサビしかないようなシンプルな構成で成り立っている。フックだらけのアルバムなのである。特にM1〝ゲット・アウト〟、M8〝ブレインデッド〟、M11〝ヘイ〟あたりは強力。「ビートルズとニルヴァーナの融合」と称されたデビューの頃を思い起こす感じ。そして、その〝融合〟という形容は、クレイグ・ニコルズという男が稀代のメロディ・メイカーであると同時に数秒で聴き手の耳を掴むリフを作り出す能力の持ち主であることを示していたのだと思う。デビュー作と同じくロブ・シュナフがプロデュースを手掛け、LAでレコーディングされた4枚目のアルバム。久しぶりに、彼の天性の才能が爆発している。

ヴァインズというバンドが、まるで嵐の荒波を舞う小舟のような危うい軌跡を辿ってきたことは、今さら言わなくてもいいだろう。大袈裟に「復活!」と騒ぐこともしなくていいだろう。04年にアスペルガー症候群と診断されたクレイグ・ニコルズは、脆い心とコミュニケーション不全による苦悩の持ち主。だからこそトラブルも多かったが、それでも彼はロックンロールを選んだ。そして、もう一度原点から旅を始めようとしている。もう大丈夫だ。**柴那典**